

【書評】

サムエル・フライシャッカー（中井大介 訳）『分配的正義の歴史』

晃洋書房，2017年，viii + 250 + 25頁

分配的正義はアリストテレスに由来する用語だが、その意味するところはロールズによって確立された近代の分配的正義とは著しく異なっていた。こうした認識はマイケル・サンデルの「正義」についての講義がNHKテレビで放映されたおかげで我が国でも広く知られるようになった。しかし、アリストテレスの分配的正義の概念がどのような歴史的経過をたどってロールズのそれへと変化したのかについては、ほとんど知られていなかったといつてよい。本書はこの概念の変化を手際よく跡付けた良書である。

著者のフライシャッカーはアダム・スミス研究の途上で分配的正義についての誤解に気付く。現代のスミス研究者は分配的正義という用語に近代的な意味を与えてスミスを解釈しているが、スミスはアリストテレスの意味で、すなわち功績に応じた分配という意味でこの用語を使用していた。スミスが近代的な分配的正義に対する敵対者だという研究者たちの解釈は誤りなのである。

第1章「アリストテレスからアダム・スミスへ」では、スミスの時代に至るまでの長い間、すべての人の必要を満たす財の分配という近代的な正義の概念がなかったこと、『聖書』やプラトンやトマス・モア、そして救貧法の中にも一切なかったことが力説されている。貧者への援助は慈愛に基づく慈善行為であって、貧者が財の分配への権利を持つといった考えは存在しなかったのである。しかし、スミスの思想の中には近代的な分配的正義の概念に結実する最初の重要な変化も現れている。

第2章「一八世紀」では、この時代に生じた貧者に対する態度の大転換がルソー、スミス、カント、バブーフの思想に即して語られる。その中でスミスは、『国富論』での描写で貧者に対する見方を大きく変え、近代的な分配的正義への道を開いた人として位置付けられている。スミスは貧者が富者よりも生まれつき劣っているという従来の偏見を批判し、両者の間に生得の能力の点で大きな差異はないと主張し、貧者を自分の友人のように見なすべきだと促しているが、こうした見方は、貧者が援助に値するという近代的な分配的正義の前提となる。さらにスミスの同時代人のカントは、理性的存在者としてのすべての人間は目的自体であって、絶対的価値を持つと主張した。善き生活に値する価値は、美德の点で卓越した人だけでなく、すべての人が持つことになるのである。そしてフランス革命末期に処刑された共産主義者バブーフによって、近代的な意味での分配的正義の理念が初めて明確に宣言される。今や慈恵ではなく正義によってすべての人が国家による財の分配に与る権利を持つとされる。アリストテレスの分配的正義は卓越した人にその功績に応じて地位と名誉を与えることであったが、バブーフ以降のそれは国家による貧者への財の分配を含意することになった。

第3章「バブーフからロールズへ」では、まず新しい分配的正義の概念に対する反動が紹介される。代表的人物は「リバタリアニズムの創設者」で適者生存を唱えたスペンサーである。彼によれば、貧者は不適者であって死んだ方がよく、国家による貧者の支援は自

然の浄化作用を停止させる故、実行されるべきではない。サン・シモンやコントのような実証主義者は国家による貧者の支援の強力な支持者であったが、彼らが求めたのは「正義」ではなく「科学」によって社会を変えることであった。マルクスも「正義」という用語を用いて資本主義を批判することを避けた。むしろ彼は「正義」や「権利」という概念の批判者であった。しかし彼は、人間は社会の所産であり人間本性は可変的だという見解によってロールズの分配的正義論に影響を与えることになる。一方、功利主義者たちは貧者の苦痛に強い関心を示し、実際に貧者を支援する社会改革に大きく貢献してきた。しかし、功利主義には個人々人を保護する正義の概念がうまく適合しない。ロールズが強調したのはこの個人の重要性であり、個人々は最大多数の利益に反する場合においても保護されなければならない。個人々は異なる目的や目標を持つ別個の存在なのであるから、正義は特定の目的や目標から中立に「基本財」の分配だけに関与すべきである。また、個人々の性格も財の分配に際しては脇に置かれなければならない。人間は社会の産物であり、努力ですら個人の道徳的功績とはいえないからである。ロールズの分配的正義には、功績に報いるというアリストテレス的要素はもはやまったく残っていない。

原書は *A Short History of Distributive Justice* というタイトルで2004年に出版されているが、その後、本訳書が刊行されるまでの間に我が国ではマイケル・サンデルの正義論がテレビ番組を通じてブームとなり、関連した書籍もベストセラーとなった。興味深い事例を用いるサンデルの議論には説得力があり、彼が目論むアリストテレスの分配的正義の復権に賛同する読者も少なくなかったに違いない。しかし、サンデルのリベラリズム批判の

軍門に降る前に、まずこの概念の歴史を知るべきであろう。本書では、近代的な分配的正義の概念が姿を現すまでの間、貧困と貧者に対する差別と偏見がどれほど広範で根深いものであったのか、そしてその後も根深いものであり続けてきたのかが極めて印象的に描かれている。こうした歴史を振り返ると、カントやロールズの存在がいかに貴重なものであったかが改めて実感される。今後、「正義」についてのゼミナールでは、サンデルの作品と合わせて本書を読むのが適切であろうと思った。

訳文は読みやすく、圧縮された内容にもかかわらず、それほど時間をかけずに通読できる。また、訳語についての訳者の工夫も興味深いものである。例えば、カント哲学のキーワードの1つである rational being (vernünftiges Wesen) が「合理的存在」と訳されている。これは従来「理性的存在者」と訳され、カント哲学では特別に重い意味を持つとされてきた語であるため、初めて目にしたときカントが経済学者にでもなったかのように見えて違和感を持った。しかし、そもそも vernünftig を「合理的」と訳すことでカントの思想から何らかの大事な要素が失われるのであろうか。もちろんロールズの文脈では「合理的」という語は徹底的に自然に響く。おそらく本書の中心に位置するロールズとのつながりでこの訳語が選ばれたのであろうと推察するが、これによって評者は「理性」および「合理性」という日本語に対して新たな興味を持つことができた。また、他にも啓発される点が多々あった。古代から現代まで、『聖書』から遺伝子工学までを網羅する思想史書の翻訳には特有の困難が伴うものと思われる。訳者の労を多としたい。

(山口拓美：神奈川大学)